

[R 2.七小校内研究に向けて]

「自ら考え、みんなで学ぶ子供の育成」

～付けた力をもとに、分かる、できる、楽しいを実感し、

共に学び高めあえる、国語・算数の授業づくり～

[振り返ってみよう
研究の足跡]

[見晴るかそう
新年度の研究]

令和1年度校内研究のまとめからの、2年度研究

校内研究部

1. 研究テーマ・サブテーマについて

研究テーマ「自ら考え、みんなで学ぶ子供の育成」

サブテーマ～付けた力をもとに、分かる、できる、楽しいを実感し、

共に学び高めあえる、国語・算数の授業づくり～

昨年度もまた講師の先生方を招聘し、仮説をもった研究授業を中心に据えて、上記の研究テーマ・サブテーマに基づく授業研究をすすめてきた。

国語については、2年間積み重ねてきた教材研究を引き継ぐとともに、定番教材となる「説明文」や「物語文」などの教材研究をより深めるべく進めてきた。算数については、3年前の市教委指定の研究発表の成果と課題を引き継ぐ授業研究の延長として教材研究を継続してきた。

全学年による国語の研究授業や選抜学年による算数の研究授業は、学びたくなる教室を学習環境として造り出し(主体的学び)、共に学び合う学習場面を授業の中に作り出し(対話的学び)、教材の特質に迫る発問の工夫により深く考える学習を創り出した(深い学び)。しかしながら、研究協議会・事前の授業研究における私たち自身の学びや、学力調査結果の分析結果は、本研究の継続を示している。

よって、新年度も上記のテーマ・サブテーマに基づく研究を継続していくものとする。

2. 研究方法・研究内容について

(1) 研究方法

① 概要

国語の教材へのアプローチは、上西先生が代表を務める文芸教育研究協議会(以下、**文芸研**と表示)の教材論・授業論による事前の教材解釈からである。

校長室で上西先生と向き合い、研究部も加わり授業者自らが教材の特質を学び、教材とする作品の一文一文を読み進めていく。私たちの校内研究には、授業力(構想力や運営力)の向上や子供の変容で明らかなように、実感を伴う成果がいくつもあったが、中でもこの上西先生とひざを交えた時間は密度の高い大きな学びの場だった。教科国語のしかも文芸教育研究に特化した実践研究を長年続けてきた民間教育研究団体の研究の成果を、上西先生の肉声を通して直に学ばせていただき、教材となる物語文や説明文の作品世界を改めて捉えなおすこの時間は、目から鱗が落ちることの連続だった。文芸研の教材の読みでは、著者の人間性・生き方や作品誕生の歴史的背景・社会的背景を包括解釈し、そこから教材の特質規定をしている。この教材の特質への迫り方に仮説を持って、授業者が指導計画を練る。この部分が、授業者が一番苦しく、模擬授業の段ではみんなで一緒に苦しみ、悩み、考え、大まかに共通理解出来た作戦で本時に臨んできた。

算数では、今年度、夏季休業後半に福田先生を招いた事前の教材研究が設定できなかったため、2年次研究の成果と課題を踏まえて、授業者が指導計画を練った。国語と同じで、指導案の「本時」の計画については、事前に「模擬授業」を実施し、授業者の研究仮説や提案

を受けて、課題設定や発問の工夫、授業の流れやしかけについて、実際の学習場面にいる児童役や、指導場面にいる授業者役になりきって、参加者全員が授業づくりに関わるようにした。この模擬授業もまた大きな学びの場となった。仮説を持って授業に臨むのが、授業者一人ではなくなったからだ。全員で想像した本時の授業展開で、全員が一コマの授業を創造する。研究授業の醍醐味がここにあった。

最後に、講師の先生を交えた全員で、提供された授業を「研究協議会」として振り返った。

① 授業研究を中心にしたテーマ・サブテーマへのアプローチ

年間講師である上西先生の講演による「書くこと」の指導を事前の準備学習として設定した。昨年度のまとめから、「読む力」と同時に「書く力」も七小の国語の授業でつけたい力の大切な基礎学力部分であることが共通理解できたからである。このように準備しながら今年度の研究を進めてきた。研究全体を振り返ると、分かる・できる・楽しいを実感する授業づくりや、学び合い・高め合う授業づくりがまた一歩前進した。「自ら考え、みんなで学ぶ七小の子供」もまた一回り大きく育ってきた。

「書くこと」の学びからスタートした今年度の研究である。そのまとめとなる「たんぼ第61号」の発行を楽しみにしたいし、新年度の研究も授業研究を中心として、引き続きテーマ・サブテーマへのアプローチを目指していきたい。

② 魅力的な教材・引き込まれる課題・精選された発問の工夫により主体的に学ぶ児童の育成

教材に関しては、国語の上西先生からも算数の福田先生からも教材研究そのものの大切さを教えていただいた。授業者である私たち自身が楽しい教材、大好きな教材、興味のもてる教材でなければ、子供たちにとって楽しく、大好きで、ワクワクして意欲あふれる授業にはならない。私たち七小の研究では、この視点を大切にしてきた。学年単位の教材研究が個人研究になってしまう七小では、模擬授業の位置づけが重要だった。授業者は原案となる指導案は作成するが、最終指導案は模擬授業をすすめる中で参加者全員の知恵を出し合い、その共通理解によって決定してきた。授業の構造についても内容についても、一人一人の考え方や発想が活かされたものになり、授業者は模擬授業の代表者として授業を展開していった。この方法は七小校内研究の大きな特長であり、新年度の研究においても引き続き大切にしていきたい。

③ 言語活動・算数（数学）的活動により、多面的に思考する子供の育成

思考活動は、学習内容に興味・関心をもたせ、何のために、何を、どのように考えたらよいか分かれれば、また授業に効果的な仕掛けがあれば、深めていくことができる。その効果的な仕掛けとなる言語活動・数学的活動の開発がとても重要である。上西先生からは、物語文や説明文を読み取るツールとして、第1回目の研究会から回を重ねるたびに作品の特質に迫る言語活動の仕掛けを助言していただいた。福田先生からも、数学的思考を促す教材・教具の提示をいただき、数学的思考には欠かせない教材の構造について、実際の授業を通して学ばせていただいた。私たちにとっては、まだまだ学ぶべきことの多い視点である。新年度への更なる継続とともに、講師のお二人にも引き続きご指導いただきたくことを希望したい。

④ 顔を突き合わせて学び合う子供集団の育成

教科指導のみに留まらぬ視点である。少人数集団だからこそ成立している学び合い、目が行き届く故の協働、ということでこの視点を楽観しないようにしたい。少人数だからこそつきたい力とはなにか、少人数だからこそ学ばせたい集団的な学びとはなにか、の問いを大切にしたい。学び合う集団は、ドラマチックな行事づくりや思いやりあふれる生活づくりの延長線にあること、顔を突き合わせた学び合いは学習活動のどこの場面に仕掛けるか、そしてそれはどんな課題を以て仕掛けるのか、常にこの問いを持ちながら授業づくりをすすめていきたい。

⑤ 全学年による国語の授業研究、数回の算数の授業研究

計画通りに実施できた。国語の全学年による授業研究は継続しながら、算数の授業研究についても2学年で実施してきた。2本立ての研究授業では、午前中の授業については研究協議を深めることはできないが、事前検討会となる模擬授業は、共同研究・集団研究が可能である。また、それだけの効果もあった。新年度も、今年度程度の研究授業を実施していきたい。

⑥ 全学年の研究授業実施による七小らしい授業づくり

研究授業を実施し、事前の模擬授業と事後の研究協議会と合わせた授業研究を校内研究の中心としてきた。研究テーマ・サブテーマに迫る視点を定めて、実践的に、しかも教科教育における教授法理論と授業実践力の両方を兼ね備えた講師を招聘して、授業研究をすすめてきた。引き続き新年度の校内研究も、まずは私たち自身と目の前の子供たちの実態を出発点にし、七小らしい楽しくやりがいのある研究にしていきたい。

[参考資料]

全国/都 学力調査結果分析について

1. 経年変化の視点から

集団を固定して調査結果を数値で単純比較することにより、青梅市全体・東京都全体における七小の（教育行政が求める）学力の相対的位置が分かることになる。つまり、今年度の第6学年を分析対象にすれば、昨年度第5学年の都学力調査の結果と今年度第6学年の全国学力調査の結果から、この2年間の対市・対都の学力相対位置の上昇、または降下の変化を捉えることができる。

この視点で青梅市・東京都・七小の国語科における2年間の平均正答率を比較してみよう。

年度	学年	青梅市	七小	東京都	
H30	5年	56.4	<60.0<	65.5	都学力調査
H31(R1)	6年	56.0(-0.4)	<61.0(+1.0)<	65.0(-0.5)	全国学力調査

学力調査の設問構成や設問内容については様々な議論があることを承知の上で、学力向上の根拠の一つとしている数値を見てみよう。青梅市と東京都の中間に位置する七小のポジションは、昨年

度・今年度を単体で比較しても変化は見られないが、経年変化の視点で見ると大きな変化がある。青梅市も東京都も平均正答率は**マイナス（－）**に推移している。これは、都学力調査の設問よりも全国学力調査の設問の難易度が高かったことを示している。しかし、七小の数値はこの1年で**プラス（＋）**に推移した。相対的にこの変化を読み取れば、七小の国語力は確実に高まっていることになる。学力調査そのものに議論があるにせよ、それを越えて成果を確実に上げているのが私たちの校内研究である。このことを全員で確認し合いたい。

2. 第6年全国学力調査結果の示す、**重点指導項目**は

文科省の示す学校別解答状況整理表（S-P表）からは、設問14項目中8項目に重点指導の必要性が指摘されている。しかし、このうち3項目が漢字の書き取りであり、2項目が解答選択設問である。**残りの3項目**はすべて、情報を整理し、設問に示された条件に合わせて文や文章を考えて書く設問である。設問内容の理解と同時に、文や文章の構成力が求められる。新指導要領に合わせて整理した「七小国語系統表～七小でつきたい力～」の**書く力**関連項目を踏まえた授業づくりが、新年度の国語で求められる。

- 1の3 **目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にして書く。**（七小）19%/（都）28%
- 1の4(2) **文と文との意味のつながりを考えながら、接頭語を使って、内容を分けて書く。**
33% / 51%
- 3の3 **話し手の意図を捉えながら聞き、自分の考えをまとめて書く。** 62% / 66%

3. 全国学力・学習状況調査結果チャートより

本校の調査結果を集計した値を基にしたチャートを分析してみた。
児童質問紙における調査結果を集計すると、「学習に対する興味・関心等」の領域に、校内研究による授業改善の大きな成果が見られることが分かる。

この二つのグラフでは、「全国基準」・「東京都基準」のレベルを円の中心に近い太い破線で表している。基準となる破線の内側にグラフがあれば、七小の調査結果は標準値より低いことになるし、また逆に、破線の外側にグラフがはみ出していると標準値より七小の調査結果が高いことを示している。

七小の児童は、「国語への関心等」の質問項目に対して大きく肯定的な回答をしている。研究仮説を立て、模擬授業で本時案をもみ合い、検証授業を経て、協議会で検証結果を共通理解し合うようにしてきた。これまで3年間続けてきた私たちの研究が、児童にとって、次が待ち遠しくてたまらない国語の授業を生み出している。このことをしっかりと踏まえて、新年度の校内研究についても考えていきたい。市教育委員会指定2年次研究のずっと以前から脈々と続く授業研究の太い柱を、引き続き校内研究の幹としたい。

